
異世界からの誘い

ネーミングセンスなしたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からの誘い

【Nコード】

N5314Z

【作者名】

ネーミングセンスなしたろう

【あらすじ】

異世界に召喚されてしまった現役高校生の男、なかむら中村 そういちろう総一郎。しかし、ハーレムもない、字は読めなくなる、勇者にもなれない、魔法は使える！女の子にはもてない。ごく普通の青年が異世界に飛ばされるお話。

ファンタジーには素人の筆者が描く。エセふぁんたじー！
暇つぶしになったら嬉しいです。

次元の移動と出会い（前書き）

この小説には出血などの表現があり、不快になるかもしれません。そういう表現が嫌い、苦手な方は戻るをクリック！

俺の服装がおかしいというような目で見てくる。

「あの〜ここから聖神町にはどのように行けばいいですか？」
相手は首をかしげている。

「それってどこですか？」

これには驚いた。聖神町とは少なくとも県内では一番有名な町だと思っていたが知らないようだ。てか有名だろ。

「ああ、なら近くの町はどこですか？」仕方がないので交番に頼るかと思つて、聞いてみた。

「はい、ここからだと南東に30分ほど進みますとありますよ」
笑顔が眩しい。

「な、南東？」

今は方位磁針なんか持っているはずがないので分からない。

困っている俺を見て、その人は提案してくれた。

「ああ、この野草集めが終わるのを待つてくれるのなら案内しますよ」

「いいのですか？」

こう言われたらもうすっかり送ってもらつ気マンマンだが一応、聞く。

返事は笑顔でOKだ。

「はい、私もそこに住んでいますので」

「ありがとうございます、あつ手伝いますよ！どれを集めたらよいのですか？」

「なら…コレです。お願いします。」

そういつて差し出された草は青い、見たことがない草だ。

「ほう〜なかなか綺麗ですな」

正直な感想だ。

「ハハツ！何を言ってるんですか？ただの薬草ですよ？」

笑いながらまるで俺がジョーダンを言ってるようにいつてくる。

「薬草ですか、これが…薬剤師か何かをやってるんですか？」

「違いますよ、商品ですよ道具屋の」

「ああ、なるほどコレが売れるんですか！？」

半信半疑で聞いてみる。確かに綺麗だが飾りに使えるというほどでもない。しかし、草にはどんな価値があるかわからないな。

「ええ、初心者でも使えるので冒険者の方々が…知らないんですか！？」

「え！？知りませんけど…」

「あなた、何なのですか！？」

いやいや、そんな格好のあなたに言われたくないよ！！！！口には出さない。

「オウオウ！！！！ここは誰の縄張りか分かって入ってきてるんだろ
うなあ！？」

ガラの悪そうなてか盗賊的な格好の奴が来る。

また、RPGのゲーム風な格好だ。

「おお、コイツは頂くぜ」

そう言っつて、薬草の入った籠を奪う。

「え、あ…あのそれは、薬草と商品が…それがないと困ります
この台詞で俺の耳と善心がピクリと動く。」

「ああ？文句あんのか！？」

そう言っつて、男は女性に近づく。

「なんなら、身体でもいいんだぜ？」

そう言っつて、彼女の身体に男は触ろうとする。俺が動く。

横から男の腕を掴む。力を込める。

「いつてーな、何だお前？」

「それを返して、失せろ！！！」勢いはないが精一杯、睨みながら言う。

「おう、文句あるなら殺すぞ」男はそう言って、剣を抜いて、こちらに構える。

「それ：本物か？」こんな時に小ばかにしたような口調で言うのは無謀だが何も考えずに言う。

「舐めんなよ」そう言って、斬りかかってくる。慌てて避ける。

身体が軽い。その後の連撃もかわす。

「借りますね」

そう言って、彼女から剣を拝借する。

剣道は一日体験レッスンをしたことがあるだけだが…

敵は走って斬りかかってくる。それをかわして、もう一撃来る前に抜刀と共に斬る。

男は腹から血を流す。間が空く。男は崩れた。

その時、男を中心に地面に何か光る円と文字が描かれる。

「危ない！！！」悲鳴に近い声で女性が叫ぶ。

【フレイム・ニードル・レイン】

空から様々な色の光る棒が何本も降ってくる。

咄嗟に頭を手で覆う。が腕の隙間から俺の上に丸い白い円盤の光が見えた。

【マジック・シールド】

その円盤が防いでくれた。女性の周りにも何かの儀式の陣のようなものがあつた。

「ありが…」ありがとうと叫ぼうとしたが彼女の上から先ほどの棒が接近していた。頭より先に身体が動いていた。彼女のところに駆けて行き、庇う。

棒は俺の背中に刺さったのか熱を背中から感じる。

吐血をする。彼女が無事なのを確認し、傷口を見る。おびたらしい血の量だ。

心が折れて、

そのまま、意識が遠のいていった。

2 話目にしての襲撃（前書き）

文で変なところなどありましたら、是非教えてください。
国語は苦手なので…。

2 話目にしての襲撃

気が付くと、ベッドで寝ていた。

が自室ではない。ボーっと状況を飲み込めずにいると森の女性が入ってきた。

「あっ気がつきましたか！」

そう言つて、さっきと違う、今度は白い布の服を着た彼女はベッドの横に立つ。

「ここ…は？」尋ねる。

「リトル・グラウンドです。」

…ダメだ。聞いたことない。てか外国か？外国なのか？確かにこの人やさっきの人（賊）はヨーロッパ風だったな。

「ここはなんて国？」

「…」
「ご両親のどちらかが日本人ですか？」聞いてみると思わぬ返事が…。

「はい？日本人とは？」

本当に知らないようだ…

「JAPANESE!!! OK!？」

彼女はビクツとする。OKではないな…。必死に言うが本当に知らないようだ。

…待てよ。さっきの光は何だった？いろいろ考えていると彼女は言

う。

「あつ水、飲みます?」

そういえば喉も渴いていたな。遠慮なくもらうことにした。

「わかりました」そう言つて、手を掲げる。何かと思つてみていると手から光が出て円盤を作る。そこからベッドの横に置いてあつたコップに青い光が流れると水が溜まつていった。

「どうぞ」とコップを差し出してくるが啞然とする俺。

「ああ、うん。ありがとう」

一口、普通の水だ…。

「もしかして…失礼ですが魔法を知らないのですか?」

「魔法?」

魔法とは…ゲームとかの奴か?なぜそんな事が出来るのだろうか?

「あなたは何なの?」

「へ?」

「森に急に現れたかと思つたら常識を一切知らないし」

ここは俺が住んでいた世界じゃないのか?このような疑問が沸いてくる。さっきの魔法といい、服といい、俺の住んでいた世界とは違うように感じる。

「俺は…紹介、まだでしたね。中村…なかもり総一郎そしいちろうです。あなたは?」

「私はリラです」

やっぱり、名前も違う感じだな…。

「変わった名前ですね…」

「そうか?そうだよね?うん」

とりあえず…こちらの世界では都合が悪いかも…。少し考える。
そして…決める。

「う、うーん、何か使える名前を考えて！」

これには驚いたようだったが素直に応じてくれた。

「じゃ、じゃあルス・セルシアなんてどうですか？」

「ルス・セルシア？」

ついにファンタジーっぽい名前まで手に入れてしまった。結構いいな〜と思いつながらガッツポーズをする。

「セルシアさん？」

「さんはいらぬいよ。」

見たところ歳はそんなに違うわけではなさそうだし。

「ああ、俺は日本というところから来たんだ。言語が同じで助かったよ」

「ええ！？言語は世界でこのムニラ語に統一されたのでは？」

驚いている。こっちの常識はまったくないな…。てか日本語そんな呼び方の上、統一されてんだいいな〜。永住しようかな？無論、冗談だが。

社会勉強が必要そうなので頼む。

「リラさん、町を案内してくれない？」

「え…あ、はい」

そのまま、町を案内してもらうことにする。

今、俺らは古いヨーロッパの町を歩いている。

リラが中でも立派な建物を指差して言う。

「あれが主に治安維持活動をする、ゼルリメス騎士団です。」

「騎士団かあ〜」建物の前には青い制服のようなを着た人が二人いた。腰にはレイピアらしきものがある。（剣かもしれないが）
「あちらが市場ですよ〜！」
そこには多くの人が露店を出して、買い物客などで賑わっていた。

「すごい!!!」俺の正直な感想がついこぼれる。
元の世界にはないような商品が数多くある。

魔力が込められた宝石や変わった食べ物や服「コスプレみたいだな」などが沢山あって、興味を引いた。

「にーちゃん!!!どうだい？ファルコンの肉だよ！15ギルだよ！……！」

感じの良い店のおじさんが声をかけてくる。

欲しいが金がない。諦めようとした時、リラが言う。

「二つください」

「まいどあり!!!」

そして、リラは銅貨を渡して、商品を受け取る。

「これは森でのお礼」そう言って、一つくれた。

「ありがとな」受け取って食べてみる。とても美味しい。

「旨いな」

「そうですね」

歩きながら食べる。こちらの世界は食い物も美味しいな。
新たな発見をした。

そして、歩いていると広場に出た。

「ここはオードラン広場です。」

「それは人名？」

「そうです。ドラゴン種のドラゴンがオーと云う人によって捕獲され

たのがここだからです。」

「ほうほう〜」

この世界にはドラゴンもいるのか…。

「見てください！ちょうどショーが始まりますよ！」

すると空に巨大な魔方陣が現れる。（リラに円盤ではなく、魔方陣だと先ほど指摘された）

そこから炎を吐き出す竜が現れる。翼をはばたいて、飛んでいる。

「ギョルルル」

俺とリラの真上を飛ぶ。風が舞う。かつけー！！！！

そこに再び、別な魔方陣、そっちからは巨大な男が出てくる。剣と盾を構えて、ドラゴンに立ち向かう。

ドラゴン、火を吐く。男は盾で炎を防いでやり過ごす。炎が止むと剣から稲妻が出てきて、ドラゴンの動きを止める。

男は接近して、その首を斬ろうとする。しかし、ドラゴンは炎を吐く。

だが男は炎が直撃しても立ち向かって行く。そして、ドラゴンの胴体を真っ二つ。ドラゴンは霧のように消える。同時に男も倒れる。

「コレがその伝説です。」リラが言う。

「相打ちだったのか？」

「そうです」

広場の中央には男の像があった。近づいて見てみる。

そこには屈強そうな身体の男であった。

その時、広場がざわつく。人々は広場の出口に走る。只事ではない

ようだ。

「逃げましょう！」リラも慌てて、俺を連れて、広場から出ようとする。

素直に応じて、走りながら聞く。

「何があつたの!？」

「魔力です。しかも悪魔の類による魔力を感じました。」

「悪魔？」そんなものいるのか…。

その時、左後方からは女の子の泣き声が聞こえた。そして、右前方には母親が子を探しているのが見える。

「悪い、先に行つてくれ。」リラにそう伝えて、女の子の所に人混みを掻き分けていく。

「おかあさあ〜ん!!!」と叫びながら、歩いていた。近づいて言う。

「こつちだよ」そう言って、抱きかかえて、母親の所に連れて行く。

母親の元に行くと、子供の名前を言って、近づいてくる。母親は子供を抱くと、お礼を言って、走って逃げる。

出口は人でいっぱいだが広場はガラガラになった。

その時、俺の前に黒い光が現れる。そして、二人の漆黒のローブを着た男が現れる。

「コイツか？」片方が言う。

「コイツですねー、間違えないっすよ！」

俺か？俺なのか？

「サクツと殺しましょうよ！」

「そつだな…。」

そう言って、黒衣の二人はファイティングポーズをとる。

なぜこうなった。

2 話目としての襲撃（後書き）

ご意見・ご感想がありましたら、御願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5314z/>

異世界からの誘い

2011年12月18日07時45分発行